校長室だより～燦燦～ №３７２

花咲山

2021.6.10

先日、花見山公園に行ってきた。もう何年ぶりになるか定かではない。かの秋山庄太郎氏のおかげで、幸か不幸か花見山公園は一気に知名度が上がり、花見のシーズンには、地元民である私など近づくことすらできない遠い存在となってしまっていた。

それが、どこか行けるところはないかと考えていたところ、「そういえば」と思い浮かんだわけである。道はすいすい、駐車場には車は一台もなかった。桜のシーズンではなく、コロナ禍でもあるせいか、訪れていたのは徒歩で来園していた数人という状態であった。

さてさてどんな花が咲いているのかと案内表示板を見てみると、５月下旬から６月上旬は、何も咲いてはいないという、１年を通しても珍しい期間であることがわかった。道理で人がいないわけである。

それでも、軽いハイキング気分でスタートした。案内表示には、３０分コース、４５分コース、６０分コースとある。非常にわかりやすい。とりあえず、花見山の頂を目指すことにした。途中は緑のみである。当たり前だが、本当に花は咲いていない。悲しいかな案内表示は正しかった。

頂上にたどり着いた。福島盆地が一望できた。東の方角から信夫の里を見ることはなかなかない。新鮮であった。福島市役所の建物が意外と大きいことに気づかされた。普段は見ることがない方角からの信夫山は、いつもとは違う表情を見せていた。我が家はというと、一盃森の陰で残念ながら見えない。暑くもなく寒くもなく、その上、風もないという穏やかな花見山日和だった。花はなかったが、近くて遠い花見山に来ることができたという小さな達成感と満足感を味わうことができた。

この手入れが行き届いた公園が個人の持ち物だというから、今更ながら驚かされる。まさに福島が誇る名所であり福島の宝である。だが、正直に言うと、やはり花見山の桜をこの目で見てみたい。

私の妻は、よく花見山を“花咲山”と言っている。昔、「花咲山じゃなくて花見山じゃないの」と指摘したことがあった。「いいの、花咲山なの」そう返ってきた。妻にとっては、花咲山なのである。確かに、まだ桜のシーズンに訪れることができていた花見山から見える桜は、花咲山という表現が合っていたように思う。彼女の感性なのだろう。そして、自分のものとしての花見山を表現していたのだろうと思う。彼女にとって、花見山、いや花咲山は、特別な存在なのである。

桜のシーズンをはずせば、花見山にも来ることができるとわかった。アナザースカイとまでは言わないが、ちょっとした気分転換にはいいかもしれない。近いので年に何度でも来ることができる。あるいは、桜のシーズンでも、徒歩による強行突破を企ててみようか。そんなことも思った。

これからは、私も花見山ではなく、花咲山と言うことにするか。我が家専用の呼び名があってもいいだろう。花咲山、いいかもしれない。